

して約二か年の歳月を過ごしたことになる。

今、この手記を終わるに及び、あのハストリハンカ收容所の戦車壕に埋葬することもできず、極寒の地に雪をかぶせて埋めてきた戦友たちの遺族の方々に何と申し上げてよいやら、その言葉もない。亡友よ安かれと心から祈るものである。

飢えと寒さの苦境から免れ

満三十年を記念して

和歌山県 松本 安次郎

四〇一二部隊

関東軍とかつては誇っていたあの精銳部隊も、昭和十九年ころより逐次その影をひそめ、南方の応援及び国土防衛等で満州より引き揚げと聞く。

ソ満国境を流れるウスリー江（江幅約一キロ）を隔てて、煙突の高さでは東洋一といわれるイマンの街（推測三十万の人口）を目前にする満州最東端の町虎頭の一角

に構える我が四〇一二部隊。初代隊長北田政治、十九年中山甚七郎に引き継がれ、二十年の年明けとともに転属、配属と回を重ね、三月ころ遼南の方に転属される約三十人ほどの中に松本が含まれていた。

工兵隊

満州国第七十九旅団即成混成部隊工兵隊、隊長陸軍大尉堺省三、当時隊長当番をしていた松本に向かって、「煙草はどうか、足りるか。」と聞く。「足りないです。」と答えると、「内地では三本くらいしか吸えないぞ。」と。そのころ、兵には一日七本くらいである。

何事もなく歳月が過ぎ、やがて夏が訪れるころ、満州の日本軍が集結して大演習が始まるとうわさが出た。

遂にその日が来た。完全武装（約四十キロ）を身につけ、約五十キロの行程は強行軍であった。目的地に到着して見ると、驚くばかりの大勢でその数幾万か。

我々工兵隊の目的は、山に登って穴をつくるにある。

岩の質は内地で見えるみかげ石と全く同じで固く、鎚を振うになかなかはかどらない。作業は昼夜交替で行なわれた。たまたま通りかかった満人は我々の作業を見て、

「火薬を使用せんのか。」と不思議そうに言いながら立ち去って行く。日本人の運命は満人の彼らにはすでに感じていようであった。

そのころより、だれ言うともなく我々の死守するのはここだなとささやかれた。数日後、交替で山からおりて来た。班長一人しょんぼり天幕の前に立っていた。「日本負けたぞ。」自分の耳を疑ってなお確かめるために、「うそだろう。」と言えば、「内地から報せがあった。」「班長それ本当か。」と重ねて聞く。「日本は無条件降伏や。」と言って立ち去って行く。後に残った松本は、ただ呆然とそこに立っていた。

終戦

午後、全員整列し、隊長より天皇陛下の終戦の言葉あり。時は二十年八月十五日。所は安東より五十キロほど隔てた山で終戦となる。

それより山を降り、安東近くのハマタンという町にとどまり、ここで武装解除され（武器から襟章に至るまで）、全くの丸腰となる。このハマタンという町の表通りの商店街は、日本人が経営して栄え、満人たちは、裏

通りで細々と生活していた。ところが日本軍が敗戦となるや、一変して国旗を掲げて祝っているのも少なくな

い。
移民達の食糧も敗戦を境に米からコーリャンにかわると聞く。

当時、現地解散の部隊もあって、一飯の食を求める者、また逃亡して食をあさる者、満人に変身（満服着用）する等、また当地方に移民していた日本人のさまよい、救いを求める者、まるで修羅と地獄の境を逃げまどう、実に悲惨な光景、表現することを知らず。

ハマタンの駅、満州鉄道の社宅へ、数人の者が二日間警戒に当たる。婦女子は中で脅えていたが、男はことごとく拉致されたか、一人も見えなかった。

それから間もなく西安東に移る。ここは町から離れた小高い丘の上で、前は鴨緑江が流れ、遥か彼方に新義州が見える。ここでソ連の指示の出るまで待機するのである。

隊長の訓示

隊長は「我々は、シベリアに抑留されることになる。

シベリアの生活は実に厳しく、食生活においても非常に
つらい思いをせねばならない。今からそれに耐える訓練
を必要とする。」

思いなしかそれからの食事は少しずつお粗末になつて
いった。

幾日か過ぎたある日、笠原小隊長の引率で五十人ばかり
散歩に出かけた。一キロも行かぬ中に緩やかな斜面の
農場に出た。ちょうどそこにアカシアの大樹が四、五本
ポツンと立っていた。ここまで来ると笠原は黙ってアカ
シアの木の影にあおむきになって長々と寝転んだ。兵た
ちはみな一散にマクワ瓜畑に散った。

松本は笠原小隊長と三メートルほど離れたところで横
になりむなしく空を眺めていた。松本は、ときどき小隊
長に注意してみるが、身動き一つしない。ただじっと目
を閉じているようである。一方、兵たちは広い瓜畑で楽
しんでいる。

ふと馬蹄の音が遠くから聞こえる。百メートルほど向
こうに副官が馬上からこの光景を眺めている。しばらく
してそのまま引き返した。やがて時刻が来て帰營する。

堺隊長と笠原小隊長は肩を並べて列の前に立っていた。

隊長は兵に向かって、「古い支那の言葉であるが『李下の
冠瓜田の靴』と知っている者はその意味を言ってみ
よ。」と。すると松本の隣にいた山本が、その意味を解
く。その間を置かず、「その通り。」と言うや隊長の手は
笠原の頬の右に左にと鋭く、四、五回とんだ。しかし、
笠原小隊長の不動の姿勢は少しも崩れなかった。

その夜、小隊長は可愛い部下十二、二人を連れ逃亡す
る事態となった。

マラリア

こんなことが起きて間もなく、松本は熱病にかかり、
診察の結果マラリアと診断される。

三日熱と聞くと、四十、四十一度の高い熱が毎日夕方
から三時間くらい続く。看護は同胞、木野に受ける。食
事は、一切とれず、一食当たりリンゴ一個しぼった汁を
飲むだけ。治療として「チンキ」の錠剤一回に一錠だけ。
病状はますます重態になる。このとき、折悪くも奉天に
移動となる。道中は大八車に乗り、数名の同胞にひかれ
て行く。ひかれながらも耳に入るのは、「こんな病人を

シベリアへ連れていく者もえらいが、連れられる者もえらいなア。」という言葉である。自分の今の心境は、「戦争に負け、また、この苦しい病に冒された今、自分の命には少しの未練もない。しかし、死ぬこともできず、ただ成り行きに任せているのは残念というよりはかにない。」ということである。

大八車で揺られておよそ三キロで安東の駅、それより貨車ですし詰め、野宿、苦難も幾度かの末、やっと目的地に着く。即時、収容所の病院に入院。

数日後のある夜、堺隊長が見舞ってくれた。別れの言葉に、「本隊は明日シベリアへ行くことになるだろう。

ソ連は謎の国だから幽閉のおそれがある。ソ連に行ったら常に大部隊と行動せよ。」と。また、そばにいた看護人に向かって、「松本はかくれてでも水を飲むかも知れぬ。水を飲むと死ぬかも知れぬから、注意して看護するよう。」とつけ加えて立ち去った、これでまた、本隊と別れる運命となる。(二十年九月末ころか、十月の上旬)

十一月も終わるころ、やっと退院できた。この収容所の中に大きな建物が幾つも並んでいた。この収容所に

る日本人は元軍人と、満州に移住していた地方人が入りまじっていた。(襟章がないので軍人と地方人の見境がつかない) 松本の隣に(隣とは寝食ともにするを指す) 南と名乗るよき若者がいて、松本をよく世話してくれる。三度の食事も少ないので、南は食糧獲得に全力を尽してくれる。また、いま一人の武田と名乗る若者、これまた紅顔可憐の美少年というのは全く彼のことで、容貌・性格・態度等、また若さあふれる澄みきった声、どれを見ても群を抜いて見えた。こうした二人のよき友は、病み上がりの松本の面倒をよくみてくれるが、二人の重荷にならぬようにと努力はすれど、思いに任せず、ただむなしく日を過ごしていた。

謎の男

ある日、南の獲得した馬糧に使用するトウモロコシを屋外で飯盒に入れて炒っていると、「それうまいか。」元将校らしい男がすぐ後ろに立っていた。(他にも五、六人炒っていた) 叱られると思って低い声で、「ウン。」と言うと、「ついて来い。」と静かな声で歩き出す。男の後について行く。左側に日本軍の馬であったのか、何百頭

とつながれている。右側の大きな建物に入ると、四斗だるが一面に並んでいてふたがない。中身は肉が詰められていた。馬肉の塩漬けだろう。次の建物に入るとここは食油のドラム缶で、これもずらっと並んでいる。これだけ松本に見せると、くだんの男はいずれかへ姿を消した。喜んで早速三個の飯盒に肉と油を入れ、転んだドラム缶から流れ出る食油を尻目に逃げ帰った（ドラム缶を起す体力がない）。

翌朝、全員整列となる。これが忘れることのできない奉天編成六十大隊。

六十大隊

時は昭和二十年十二月十四日、奉天編成は最後であった。小隊ごとに整列したが、南も武田も姿は見えぬ。一体二人はどうしたのであらうと、少し寂しさを感じていた。しばらくして武田が姿を現わしたが、列に入らず、前に立つ。それから澄みきった声で、「ただいまから我々はソ連に抑留されることになった。僕は今から君たちの小隊長である。」ここまででは聞こえたが、後は何を言っているのか、松本の耳に入る道理はなかった。今、

武田の言葉で大きく隔たりができたと思うと、言い知れぬ寂しさがこみ上げてきた。命の続く限り武田と南と行動をともしようと考えていたのに、とうとう南は姿を見せなかった。ああまた孤独か。

いよいよシベリアに向かって日本人の運命を乗せた列車は発車する。速度が加わってくると、汽車の窓から飛びおり、逃亡する者も後を立たない。武田は叫ぶ。「逃亡したい者は今のうちにせよ。」と。窓から目に映るのは、寒空の涯しない広野に、焼け残った日本軍の兵舎があるだけで、敗戦の惨めさを物語っている。

汽車はハルビン、チチハル等の駅に停車する。日本人の移民はこんな所にもいたと見えて、女や子供たちの姿が見える。近づいて話かける者もいる。抑留列車と知って懐かしかったのであらう。この人たちの食事の苦しみの話も哀れであった。満州里まで来ると、武田は叫ぶ、「逃亡はもうやめよ。」と。

チター

汽車は満州を離れ、チターに着く。武田の小隊は汽車よりおろされ、早速作業が始まる。日本軍から分取った

のであろう、山と野積みされた穀物を、貨車に積み込みの作業である。この作業中、銃殺一人、荷物全部奪われる者四、五人でる。作業が終わると、武田一行は移動が始まる。雪が二十センチ以上も積もった山道をあえぎあえぎ歩く。三十キロ、四十キロの荷物を負い、空腹と疲労で足どりも次第に重く、夜半になってやっと休憩となる。早速携行の米と携行燃料で、雪を入れて飯たきにかかる。やっと煮立ったころ、出発の声がかかる。湯をたらし米をかみながら歩き出す。

道は果てしなく続く。次第に疲れが募る。背に腹は変えられぬ。荷物の中の貴重品の米を入れた靴下を一個一個投げる。しかし、一向に軽くは感じない。つらいのは自分一人ではない。交わす言葉は、「頑張れよ。落伍したら狼に食われるぞ。」と、ただそれだけである。ソ連は言う、「五十キロを超えれば乗物、五十キロ以下は歩く。」と。しかし、この行程は五十キロ以下とはどうしても考えられない。

夜も明け、日も高く上がったころ、フラフラの状態でやっと着いた所は、深い山の中の古い大きな建物の一軒

家である。これを「ラーゲル」（収容所）と呼んだ。

第一ラーゲルの食堂

このラーゲルの食堂は柵外にあって、食事には前後二班に分かれ、柵で交替していた。

今の境遇では、一片の食物でも深刻に神経に響くものであった。ある朝食のとき（まだ暗い）、前班の者が交替場所の後班にまぎれ込んで、一人二食したことがわかり、調べにより犯人が出た。武田は犯人に一日の絶食を申しつけ、武田自身もともに絶食したのである。

この食堂の片隅で、十数人の元将校たちが一般とは別に食事をとっていた。これを将校食と言っている。

二、三日過ぎたある日、相変わらず食事をとっていると、食堂の入り口に武田が立っていた。やがて武田の声、「本日より将校食を廃止して一般食とする。作業も食事も将校も兵も別はない。」と、武田のたくましい声が食堂の隅々まで響きわたる。武田が去った後も食堂の中は静まり、声をあげる者はいなかった。武田の処置と行動に全く感嘆のはかないと、たのしく、気をよくしている松本であった。

ピラ（鋸）の目立て

夕方になって松本のそばへ武田が来て、「いよいよ明日から作業が始まる。お前はみなと一緒に伐採に出ると無事に内地に帰れんぞ。何か特技はないか。」と聞く。「特技なんて何もない。」と元氣のない返事。武田も困ったらしく、「松本、お前は内地で何をしていたんだ。」と重ねて聞く。「伐採していた。」と答えると、「そんなら鋸の目立てではできるだろう。」「目立てくらいならできると思う。」と言うと、「よかった。目立てならシャツ一枚でできる。寒い山に行かずにすむからな。」と言って別れた。

翌日から作業が始まり、外は零下二十〜二十五度と寒い日は続く。しかし武田の計らいで、暖かいペーチカのそばで一日五枚の鋸の目立てで過ごせる。『地獄に仏』の思いで深く感謝せずにはいられない松本であった。しかしその武田は再び松本の前には現われなかったのである。

第二ラーゲル

シベリアに来て二か月三か月ともなれば、口になじめ

なかった黒パンも不思議とうまさを感じるようになった。作業は山から山へ移動して行なう。今度の小隊長は山ノ上と聞く。

ここは各自携行天幕で五、六人の天幕生活である。一般は伐採で、松本は目立てで、他に三人いた。作業場はお粗末ながらペーチカがあった。零下三十度下がると作業も休むことになる。栄養不良と寒さに倒れる者、凍死か餓死か、それも若い者の方が死の率が多いのである。土が凍って穴を掘ることもできず、死者はただ雪で埋めるだけと聞く。

ノルマ

切り倒した材を長さ二メートルに切り、幅二メートルに並べ、高さ二メートルに積み上げて四粒とする。それが四人の一日のノルマとなる。ノルマだけしておれば問題ないが、それ以上の粒について一粒ごとにわずかなパンが出る。これをねらうのは若い者に多い。このわずかなパンをねらうのが、死因を招く結果となる。

二十一年四月の下旬となると、山の雪もやわらかくなるころ（零下二十〜三十度の雪は砂状で、握っても固

くしめつてこない)、次の場所に移動するための伐採となり、松本もグループに加わる。立木の種類は黒松・赤松・白樺がほとんどであった。太さは、直径五十〜六十センチが多く、長さは二メートル材で、八切れ、十切れのものであった。

イリクーツク

伐採も終わり、雪の解け始める五月上旬、三回目の移動であった。今度の小隊長は福田中尉と聞く。最初の一日は街の建築の工事である。地下何階掘るかわからない。いろんな機械が数台並んでいる。ここで働く人々は、国籍の異なった男女が入り混じって働いている。ソ連婦人将校の監督がたびたび巡察に回って来る。我々はベルトコンベアに土をスコップで入れる。ここで働く人たちは我々に似て小柄な人たちであり、タタールといつて日本人の元祖だと話す者もいる。第一日は変わったこともなく過ぐす。

飯たき

翌日から、炊事のかまど(たき口)で働くことになった。去年から積もった雪は五月中旬まで残る。残雪の中

で働く人たちに比べ、家の中で、しかもかまどで働くのであるから、寒さ知らずであり、その上食事も一般に比べ多く、全く恵まれた果報者であることをひそかに喜んでいた。班に戻れば、寝食をとにもする九州出身の大橋豊なる人は、大学教授と聞く。いま一人、小山信吉、福岡県若松市材木町、満州国警察官警視。この二人の友ができ、親しく話せることは苦しい中にも幸せであった。

食事の中で、一日三食のうち二食はカーシャ(玄麦か雑穀の玄穀を粉にしたもの)を糊状に煮たもので、濃度は、スプーンですくった糊状を飯盒から十センチ上よりこぼすと、はねかえる程度。これを飯盒一個二分して一人食とする。分け合うと思ひ思いに雪か水を加えて、満腹感を味わう者も少なくない。昼食は大抵黒パン携行で、朝食時に分配され、中には二食分を朝一度に食ってしまう者もいる。

小隊長と塩谷

ある晩、夕食をかまどで済ませて班に戻ると、部屋の隅の方にいた塩谷が、周囲の同胞に話している。部屋へ入ろうとしたが、自分の話と直感したので入り口で立ち

どまった。

「松本ばかりうまい目させて、チョット交代させてくれ」というと、『松本はロートル（満語で年寄り）』『俺と松本は同年や』と言うたら、小隊長は『松本は病身じゃ』と。はなはだもって不満そうである。しかし、聞いている者たちは塩谷に対して何も言葉はなかったのか、松本の耳には入らなかった。当時、松本は小隊長福田の顔すら知らない。このイリクツクに来てまだ一週間か十日もたたない。もし隊長が、これが松本と知ったとしても、年や病身まで知るはずがないのである。今の幸せは偶然と、今の今まで思っていたが、そうではなかったのか。たった今、塩谷の話を聞いて、周囲から見守ってくれる自分の幸せを、だれにも話せない喜びとして、深く味わっているのであった。

しかし、この幸せも長くは続かなかった。かまどで働く者（松本）に飯盒一杯与えられた。いつも三分の一はど残しては、小山・大橋に夜、分ち合うのを常としていた。ある日、炊事より味と質の濃いカーシャが出た。あまりの味のよさに無理して食ったのが原因で腹をこわし

てしまった。その結果二日も休み、失業となり、せっかくの幸せも食欲には勝てず、不幸を招く結果となった。

体もよくなると、ソ連の詰め所へ使役に出ることになった。出迎いのチャスボーイに連れられていくと、八畳敷きくらいの一軒建ての部屋に、白系の兵二人、ユダヤ系（頭髮・目玉黒い）一人がいた。ユダヤ兵は終始罵声を浴びている。それでも、ユダヤ兵は表情も変えず、冷静で、一言もなく立ち去って行く。白系のユダヤ系に対する侮辱、あるいは差別はひどいものである。しかし、これに忍従するユダヤ系の心中がうかがわれる。ユダヤ兵が立ち去ると次の相手は松本となる。言葉は通じないからゼスチュアで判断する。互いに笑ったり笑われたり。その一つ二つ、

「ヤッポン」太陽を指さして拝むまね。

「ダアダア」うなづくと、つばを太陽に向かって吐くまね。

「ヤッポンサムライハラキリダア」

「ダアダア。」と頭を縦に振ると、頭の上に指で輪を描いてクルクルパーのゼスチュアをする等先ほどのユダヤ

と違つて上機嫌で笑う。

こんなことをして相手になることは、身を守る安全策でもあった。

女性

そこへ二人の女性が現れた。身のたけ二メートルもあろうかと思われる大の女で、一見して遊女の風情があった。兵と女性の間にしばらく会話が續いていたが、やがてそばの松本に近寄った女が楽々と松本を抱き上げた。子供でもあやすかのごとく、横振りにしたり強く抱きしめたり、「マーリンキ」（小さい）と言いながら、喜ぶのか笑うのか抱く者も兵も声を上げて笑う。他の一人の女も、「私にも抱かせて」と言うのだろう。手を出して手から手に移される。これを見ている歩哨たちも笑いは止まらない。やがてこれもあきたのか、解放した松本の手にパピロース一個を握らせて立ち去って行く。

煙草

ソ連の煙草の中にパピロース（上級）、シガレット（中級の両切り）、マホルカ（刻みで一般用）、と三種ある。紙片にマホルカを入れ、くるくると巻いて舌でなめると

出来上がりである。捕虜にとって煙草は食事に次ぐ貴重品である。町中道中を問わず、吸い殻を拾い集め、わずかな吸い残りをよせて一本の煙草をつくる。煙草を巻く紙も吸い殻と同様で、道中野原、一度用を足したのも使われる。反古にした紙以外は新しい紙なぞ手にしたこともなければ見たこともない。

今、この女性からもらったパピロースを、大事にポケットにしまった。見ていた兵が近づき、手を出して、「煙草を返せ。」と言う。兵はゼスチュアをしながら何やら言う。言葉の中でわかるのは、「バルノイ」（病氣）「ニーハラシヨ」（よくない）「マグネオン」（交換）「クリーチ」（煙草）、そこでやっと出す氣になって、しぶしぶ兵に差し出すと、兵もまた机から煙草を出し、交換してくれた。

カンボーイ（監督）と農作業

翌日から一般作業に出ることになった。朝八時からラポートが始まる。カンボーイが来て作業の説明と注意事項を話す。「私が見えたらうつむいてラポートせよ。ソ連の偉い人が来ても同じ。だれも見えていないときは手を

休めてもよい。」と。昨年、馬鈴薯畠を機械化で収穫した。その後地を我々はスコップで引き返すのである。古いいもが黒い乾燥シイタケのような姿で出てくると喜んで拾う。

さて、カンボーイがいなくなると、あたりかまわずいもの出そうなところを探しに散る。運悪くカンボーイがやって来る。

人員が足りないと思ったか、一列横隊に並べる。二列では計算の勝手が悪いとみえる。一人ずつ指をさして数え始める。「一（アジン）二（ドア）三（ツリ）四（チテリ）五（ピアチ）」と。そこへ遠くから仲間が戻って来る。カンボーイは機嫌が悪い。「ヨットバイマアチ」（馬鹿な）「プロホラボート」（悪い仕事）。明日からノルマふやすと怒る。

日影

内地なれば今は真夏である。正午には自分の影は身長とはほぼ同じくらいかむしろ短いくらいと思うが、ここですごく長い。測って見ると身長は六倍もあった。

演習場

今度の移動は四回目である。原始林を開拓してソ連の大演習場をつくるという。現地にはすでにトラクター、戦車が入りまじって、山々至るところ騒々しく鳴りひびく。林の所々は賑々しく天幕の列をつくり、兵の数もまた幾万か我々の知るところではない。直径四十〜五十センチの大木も一本一本鎖で縛り、一度に四本も五本も難なく引き起こす。こんな光景を眺めながら与えられた幕舎に着く。日本人にはやはり二人びきのピラでの伐採と雑役が与えられる。

松本はただ一人、自分の幕舎より二キロ隔てたソ連軍の建ち並ぶ天幕の中で朝、係の兵から十枚のピラを数えて受け取り、夕方係の兵が調べて終わるを常としていた。一日のノルマ五枚。作業場の前を行き交う兵は多いが、幸いに静かで、当分何事もなく過ぎた。

ある日、ソ連兵一人が現われ、一枚のピラを取り上げ、何やら言いながら持ち去る。用が済んだら戻ってくるだろうと安易に考えていた。

だが、夕方になってもなかなか戻らない。遂に持ち去った兵は時間まで姿は見せなかった。係の兵が来た。

一枚足りない理由を話そうにも言葉は通ぜず、ゼスチュアで互いにやりとりすれど了承されず、結局一キロ離れた詰め所まで連れられ、詰問される。

ようやく解放されたが、いつもより時間が遅い。帰る道中は約三キロもある。心細いことこの上なし。

將軍と捕虜

左側は松の林で、林の中に一筋の道あり。道の左右のところでどこにソ連軍の幕舎が列をなして立ち並んでいる。右側は二百メートル幅ぐらいの河原で、その向こうに大きな河が流れている。この川原をたどって行けば身の安全と考え、淡い夕日を背に浴びながら不安を忘れようと、自分の影を追うごとく歩いていく。ふと前方を見ると、見なれぬ赤く彩られた車が追ってくる。「アッ！ソ連軍の將軍。」と直感する。無意識のうちに一歩右に寄り、不動の姿勢で挙手をする。すると彼は気づいたのだろう。車の速度をおとし、松本の左側を通り過ぎる。十メートルぐらい先で車をとめ、中より現われたる人物、ヒットラーを思わせる風格。松本の挙手をじーッと見つめながら答礼。この間十秒十五秒二十秒と続く。い

かめしい容姿に威圧され、我を忘れて立っている。

やがて答礼を終えた將軍はおもむろに車中に消える。後に残った松本は彼の車の小さくなるまで挙手のまま見送っていた。捕虜と將軍のこの対象的な場面を知るものは、ただ地平線に沈んで行く夕日のみ――。

ふと我にかえり、急がねばと足を早めて歩き出す。そのとき、林の中から一人の同胞が待っていたかのように近づき、「近道知っているから一緒に行こう。」と誘う。彼の言葉に疑問は残るが、いつもより時間も遅い。また一人歩きは危険だから、しかたなく彼に従って後に続く。林のところどころにある幕舎の列が不気味に感じる。左右に気を配りながら何カ所か通り過ぎたとき、突然飛び出て来た三人の男。彼の襟首をつかむ者、手首を握って後ろ向きに引きずる者。彼もまた懸命に抵抗する。結局、三人に連れられてゆく。松本はやっと難を免れることができた。（これに捕らえられると酷使され、その上、なぶりものにされる）

恐怖の作業場

ある作業場に、順番でやむなく、松本の行く日が来

た。

天幕設営の穴堀りであつた。四人グループにソ連軍兵一人つききりで、手に一メートルぐらいの棒を持ち、「ベストラ（早く）」「ベストラ」と、棒で背を突いたり尻を叩いたり、悪質この上ない。耐えかねた松本は、小便に立つ。その間だけでも体が休まると思ひ、その場で小便する。すると、「早く小便せよ。」と背を叩く。一時間もたたぬ間に完全に参つた松本は、スコップをその場に投げて、どっかと座り込んだ。すると、「ポチムラボート」（どうした仕事）と怒る。「たたいたからせん。」のゼスチュア。歩哨交替は一時間ごとである。次の兵も「ラボートナーダ」（仕事せよ）と怒る。しかし座っている松本は度胸をきめて動こうとはしない。組の三人は松本に、「スルナ、スルナ」とけしかける。彼らもまたたかれずにすむのである。ソ連兵三人まではソルダート（兵）、四人目は下士官であつた。下士官は松本にラボートせよとは言わなかつた。本部の自分の幕舎に連れ込み椅子をすすめた。テーブルを挟んで向かい合つて椅子に腰をおろすと、煙草を吸えと一個出した。煙草を手にす

ると、「ポチムラボート」と話しかける。表情はやさしい。クーシャイ（食事）マール（少し）ベストラ（早く）ラボート（仕事）と、言いながら顔を横に振ると、微笑か苦笑か、声は出さないが笑っていた。話が終わるとこの下士官に連れられ、随行人のように、林の中の広い円型の敷地に一列の大きな幕舎の周囲をブラリブラリと付き添つて歩いた。

漁業と将校

ソ連の漁業の手伝いせよということで、四人は指定された場所待つ。その日は姿は現われず、翌日また待つことにした。しかし今日も何も連絡も来ない。場所は間違いないが、それでも気がかりである。ちょうど昼ころになつて一台のトラックが来た。四名を乗せてどこかへ連れて行く。およそ三時間ばかりで着いた所は深い林の中で、川などある所ではない。ここで車からおろされ、運転手は何も告げずにいずれかへ消えていく。いくら待てどもソ連軍から何の沙汰もない。日没も近づく。不安は募る。四人は腰を上げてあたりに注意すれど、目に見えるものは松の林だけ。四く五メートルも歩いたか、突

然、「こらッ。」と林の中から怒鳴る。突如として現われたのはソ軍の将校であった。林の中で我々の監視でもしていたかのである。「君たちは何をしているか。」全く日本の軍隊調である。風格もよし、日本語もまことに鮮やかである。事情を話すと、彼の男、「ここで動かず待っておれ。」と言い残して立ち去って行く。間もなくトラックが来て無事戻ることができた。

「一体何のためここへ？」

闇夜と朝日と入り口

演習場の作業から解放され、次は小さな町へ五回目の移動である。移動するたびに、小隊長の顔ぶれは変わる。今度の小隊長、名ははっきり覚えていないが中西と言ったか。作業は製材であった。直径五十センチの大木も、台に乗せると数多く並んだ鋸が上下し、たちまち一回で板になる。板にすると次は機械かなで仕上げるなど、松本にとっては珍しいものばかりであった。作業は昼夜三交替であった。

ここへ来て気づいたことは、闇夜でも三十メートル前方の男女の区別ができるのであった。真の闇がないので

ある。つまり白夜である。

また、朝の地平線より上る太陽を見ることができない。今は夏で、朝六時にもなればとくに高くあがっている筈なのに、太陽を妨げる雲一つない。なおも根よく空を眺め探した。すると、一瞬にして浮かぶ。光線のない月のような眺めである。ここで見る太陽は、やや北東から出て南へ円型を描いて西へ入るように感じる。また、地平線に沈む太陽は満州で見入りの日の大きさの幾倍もある。真紅の燃え立つ鮮やかな色は言葉に絶するものがあつた。それも地平線に入るわずか十秒か十五秒くらいで瞬間の出来事ゆえ、この光景を見とめた者は、何人いたであろうか。

岩 塩

第二イルクーツクに移動となる。六回目の移動である。ここは町ではなく、列車の引込線とでもいうのか、見渡す限り貨車・客車・無蓋車が並んでいる。これらを警戒する動哨、定位置で望遠鏡を手にして絶えず眺めている監視兵がいる。彼等の目を避けて松本ら四、五人の者が、列車の間を縫うごとく歩いて行く。しばらく行く

と、山盛りに積んだ岩塩の無蓋車に会う。ここなら空からでない限り監視の手も届くまい。四、五人の者が手を延ばして手製の袋に、岩塩を詰め込もうとした。

いま少しと思うとき、発車である。見えるはずのない位置なのに、どこで見ていたのだろう。驚いた我々は列車の下を縫うように落し、無我夢中で逃げ帰る。ソ連軍もそのまま見逃がすはずはない。全員検査を受ける羽目になる。我々は検査を予期して、帰る途中に隠して置き、この難を免れる。

我々に塩は貴重であつた。木の芽・ランの根などに加えることができる。また、たまに豚や羊の骨などみつけ次第拾い、黒焼きにして粉にして食う。これらに塩を加えるとご馳走となる。

囚人

作業の行き帰りに、ときたまソ連の囚人たちが群れをなして歩いていく姿を見ることがある。集団は大体五十名以上百名くらいで、紺色の服を着せられている。鎖で隣の足と縛られたまま、農作業の使役をするのである。カンボーイ（民間の監督）の話によると、軽い刑はほと

んどなく、十年・十五年・二十年と多く、最高が終身刑で死刑はない。春の種時期と秋の収穫期に、監視兵は馬を走らせて農場を守る。秋の盗みに比べ、春の種物（特に馬鈴薯）の盗みの刑は重刑という。

褒賞休暇

ソ連は、賞罰が厳しく、年間無休か、二十日以内の者にそれぞれ賞の休暇が与えられる。無休の者には最高二十日間の褒賞として旅行ができると聞く。普通ロシア人は、六十キロ以上の通行は禁止され、証明がなければ許されない。検問所があつて遮断し、人も車も調べられているのをよく見る。

ロシア語

ある作業場に、三十戸ばかりの空家があつた。シベリアに来て二年もたてば、才知な者はロシア語の片言くらい話せる。その一人がカンボーイに聞くと「ここで働いていた農民は皆遠く日本の近くへ行った。そこには家も建てられ、農場も新しくできている。」と話す。そこで彼が、「日本の近くに行けば、リース（米）ムノーゴ（たくさん）、リーバ（魚）ストーメートル（百メートル）。」と

言えば、目を輝かせて、「ストーメートル。」と驚く。彼は鯨の潮吹くゼスチュアなどしながらカンボーイを相手に話す。

ウラル

二十二年の秋風も感じるころとなる。また案じるのはあの寒い冬のつらさ。ソ連は一体いつになったら我々を帰す積もりなのか。今の小隊の半数は、遙か西の方へ行く話が出た。その西の方の中に入れられたら、内地の土を踏むことが遅くなるか、悪くゆけば帰る望みも薄くなると考えられるのである。ところが、あれほど案じていた移動の中に松本も含まれていた。

いよいよイリクーツク出発の日が来た。列車は一路西へ西へと進む。隊長宇賀中尉、七回目の移動である。タシケント・クラスノヤンスクなお西へ進み、やっと小さな駅で停車した。日本人約二百人合流する。その中の一人、「僕は長野県出身で山本という。僕らが食う主食を運搬の途中、ソ連兵に奪われ、副食だけとなり、そのため餓死する者約半数も出た。今汽車に乗った僕らはその生き残りだ。」と言う。

列車はトムスク・オムスクを過ぎ、なお西へ進む。十日余りでスベルドロフスクという大きな町に着く。それより北に進み、四、五日で小さな町に着く。町はずれの有刺鉄線で囲ったラーゲルに入る。ここはウラル山脈に位置している。近くに「ゲーペーウ」(旧日本の憲兵に当たる)の大きな建物がある。

作業は特殊(レールがふたつの汽車を担いだ型)な鉄道工事と延長である。樹木の伐採・伐り株を火薬での爆破・軌道建設(地上三メートルくらい)その他である。この現場にドイツ人の捕虜が一人いた。

ドイツ人

昼の休憩時間に我々が集まっていると、ドイツ人が招く。彼は英語を話せる者はいないかと言う。大橋豊が相手となる。彼は、「この鉄道は私の発案で、ソ連は私を特技者として特別な待遇を与えている。今ドイツでは、指先でちょっとなめるだけで六年なら六年、二十年なら二十年先で必ず死ぬ薬があるが、日本ではどうか。」と言う。

草炭

ある日、カンボーイに連れられ、さらに奥に進んだ。

すると林の中に小さい小屋があった。

ここまで来るとカンボーイは言う。「煙草はここから先は吸えぬ。吸いたときはこの小屋で吸え。この小屋は喫煙の家という。この辺一帯は地面から地下一・五メートルの厚さが燃料である。煙草を吸えばこの辺、火の海になる。」話しながら進む。歩くとフェルトの感じがする。彼はロシア語で何とか言ったが、我々はその後、草炭と呼んだ。

屋根葺

岐阜県出身の長屋と二人で、特殊な乗り物で民家の屋根葺に行く。長屋は大工の職人で、松本は助手であった。往復、乗り物の時間は五時間かかる。家といっても一間建てで、中は六畳敷きくらいの板の間で、中央にダブルの寝台一つ、家具はわずかなもの。屋根の葺草はない。ただ板をパンパンと釘づけして出来上がりである。二人で一時間もあれば十分であった（年中、雨がなからこれでよい）。長屋はロシア語ベラベラであった。仕事が終わわり、駅で時間がある。カンボーイと長屋はいろいろ問答を交していた。松本にはよくわからないが計

算らしい。乗り物が来た。ここでカンボーイと別れる。

義務教育

たまに子供たちが学校へ通う姿を見る。手にノート一冊と鉛筆一本だけで、包み物も鞆もない。話によると、義務教育は四年とされ、それより先の進路を選択するのは本人や親でなく、教師によって決定するという。

ある重工場

シベリアに来てついに三回目の寒い冬となった。十人ばかりがカンボーイに連れられ、町に出たときのことである。急に気温が下がり、防寒準備は十分しているものの、身にこたえる。日本人の寒さに弱いことはカンボーイもよく知っている。防寒から出ているところは、目・耳・口とわずかなほおだけである。まつ毛が上下一つにくっつき、目が見えなくなるから絶えずこする。鼻から吐く息がづららとなって下がる。ほおは白くなる。カンボーイは、「互いにはおを見て注意せよ。」と言う。行き交う地方人は平気なもの。

やがて町はずれに出た。そこに大きな建物があった。幸い扉が開いていたので、カンボーイに許しを乞わずに

中に入った。寒さに我慢ができなかったからである。みな中に入ってふるえていたが、カンボーイは扉の外で黙って立っていた。しばらく工場の中を眺めていると、戦車の工場らしい。地上八メートルばかりのところ、揺りかごのような乗り物に女性が一人入っていて、前後左右自在に動きながら機械を操っていた。下では男たちは厚さ三センチくらいの鉄板を裁断し、削る、穴をつくるなど、黙々と働いている。

この建物の右側に物凄い建物がある。この建物の煙突から噴き上げる煙は黄色い不気味なものであった。「アレ何の工場やろう。ガスの工場だろうか。」とだれかが言う。すると、左遙か遠くから火花を吹き散らしながら貨車が走って来る。見惚れていると迫って来た。昼でもこんなに美しいから、夜であれば見事なものだろう。日の前を通して右の建物の正面に横づけとなった。やがて一両ずつはずされて、そのままエスカレーターに乗せられ、階上に運ばれ、中に消えて行く。この日は工場で過ごし、帰る時刻になった。途中ほとんど人影のない町（町幅五十メートルくらい）を通っていると、地下発電

所でもあるのか、響く感じがする。松本は後尾を歩いていて、町の中央にマンホールがあり、そのふたに幾つかの穴があって、仄かな煙が出ているのに気がつく。不思議に思っただけで、穴をのぞく姿勢になったとき、振り返ったカンボーイに見られ、まずいと思い断念した。この辺の町の大きな建物はほとんど重工工場と考えられた。

石けん

捕虜給与の中に石けんがまれにある。同胞の中には、この石けんを地方人に、パンや煙草と交換する者がいる。それだけでなく、この石けんを加工して、中に土や石を入れ、大きく見せて交換し、自慢する悪質者もいることも事実である。やがてこれらのことがソ連軍に知れ、衛生に悪いという理由で、身体検査をさせられた。全員がソ連軍の指図のもとに浴場で身を洗い、頭髮から蔭の毛まで剃り、全裸でドクトル婦人将校に一人一人診察を受ける。そこで体力別に作業も分かれる。（一類・重労働、二類・軽作業、三類・休養。以下入院）となる。

若いカンボーイ

宇賀中尉と、まだ独身のカンボーイとは、互によく気が合っていた。作業場もいつも明るい。小隊長宇賀は、ロシア語ペラペラである。ある日、「昨日は来なかったなあ。」と言うと、「休みだったので、小刀で指に傷をつけて、ドクトルに一日の休みの診断をもらって休んだ。」と言う。ソ連は無断で休むことは許されない。

ラーゲルに帰る途中、林の中を通っていると、ジープが湿地にめりこんでいるのに出会う。四、五人の兵とカンボーイの間に問答が始まった。(我々五十人の手をかせば十分もあれば十分と思われる。)しかしカンボーイはなかなか譲らない。話は十分ほどでつく。めり込んだジープを横に見ながら一行は歩き出す。今のいきさつを宇賀は歩きながら、『日本人をかせ。』『他の仕事にかさぬ。』『ちょっとやないか。』『少しでも、それだけのエネルギーが消耗して、明日の仕事に影響する。』と言って断った。」と言う。

美味とカロリー

カンボーイやチャスボーイは人参や大根などそのままはおぼっているのを見る。梨かリンゴでも食うような感

じである(ロシアには果物がなから彼らにとって果物と思っている)。

ある日、昼食携行の黒パンをたき火で焼いているのを見たカンボーイが、「パンを焼いて食ったら栄養がなくなるから焼くな。」と言う。なるほど彼らは、魚(主として鮭・鱈)を塩漬けにし、副食として生のまま口にする。それを思うと、「味わって食う日本人、カロリーを重んずるロシア人」か。

我々の炊事を担当している人の話。「ソ連は捕虜給与を守っているかは疑わしい。日本軍隊の一人当たりのカロリー、二千五百から四千である。今、我々の食事は、千五百から二千までのカロリーで、例えば幼児が寝たきりの病人食に当たる。」と。酷寒の中で防寒被服を身につけると、飢えた体は歩くだけでもやっと精いっぱいと言っても決して過言ではない。手をくださない殺人行為なのだ。ソ連にとっては、日本に対する戒めであろうか。

ドイツ人と日本人

二十三年四月ごろ、鉄道補修作業の帰りに、駅のない

停車場で数十人の我々が汽車の来るのを待っていた。そこへ、前後に着剣したソ連兵に付き添われたドイツ人捕虜二十人ばかりが通りかかった。これに気づいた同胞の一人が列に走り寄り煙草を乞う。すると、ドイツ人の一人が煙草一個を投げる。これを見た一人、また走る。すると後についている兵が着剣を突きつけて来た。これに驚き、逃げ帰る姿を見て、いろんな意味で考える点がいくらもあるように思われた。そのとき、我々のチャスボーイは言う。「ドイツ人は頭がよいから油断ができない。銃は常に着剣して手から放さず、二人で警戒するが、日本人はドイツ人ほどよくないから安心で、銃を肩にかけていても結構だ。」と言う。（ここでドイツ人と我々を比較してみよう。）

ドイツ人は朝八時に始めると、ノルマに合わせて計画的に、しかも着実に、ただ黙々と働き、午後、ノルマが終わったときがちょうど四時である。これが百五十前後のパーセントとなる。この超過の五十％にパンか煙草が与えられる。日本人は隣の同胞に負けないように頑張る。極端な者は半日で終わる。残る時間であたりを物色

する。煙草の吸殻はもちろん、少しでも空腹を満たすことのできるものは、いもの黒く腐りかけたもの・柳の芽（これはものすごく苦い）・松のあま皮など、ものを選ばずあさる。これでは作業ぶりが悪いということ、五十％くらい、良い者でも八十％くらいとなり、ドイツ人と大きく隔たりができる。あるカンボーイが言う。「そんなことしたらノルマふやすぞ。自分が損やぞ。」と。「ドイツ人を見よ。」と注意されても、また、わかっていてもそれが出来ないのが日本人である。

ダモイ（かえる）列車

ウラルに来てから、東京ダモイの話はよく聞くが、近頃急にうわさも多くなってきた。あるカンボーイは言う。「モスクワからウラジオまで一万キロ、スベルドロフスクからモスクワまで千キロ。ヤッポン東京タームターム（東京遠い遠い）」と。

しかし、このうわさも現実となってきた。ある日、整列の中からアルファベットの「イ」のつく者を二十人出せ、この者は別の箇所へ移すと言う。また、ロシア語の達者な者は、このときすでにどこかに連れ去られてい

た。

夢に見る憧れの内地、ほとんど諦めていたダモイ列車も今は現実となつて、列車の中で喜びに満ちていた。しかし堺隊長の言葉の中にソ連は謎の国という言葉があった。いつどこで何が起こるか分からない。全く油断も隙もない。

スベルドロフスクも過ぎ、沿線はほとんど森林地帯である。汽車で二日走り、やっと人家や町が見えるほどである。

汽車は今オムスクを過ぎ、高原地帯を走る。しかし平坦で、高原とは少しも感じない。それが延々と続いている。

線路を眺めていると、ところどころに標識のあるのに気がつく。注意していると、この標識は一キロごとであることがわかる。(速度を測ることができる。)そこで自分の呼吸を自然にして数えると、平坦なところで八回で四キロとなり、登り坂になると十一回である。

この列車は、一車両が小さいので、四十トン・五十トン、大きいもので六十トンである。これらの車両が五十か

ら六十両連結されている。

列車はイリクーツクに近づく。去年の秋に別れた同胞たちはどうしているかな、もう帰ったかな、などと考えながらイリクーツクの町を眺めている。すると線路のそばにまだまだ多勢の日本人が見える。

イリクーツクも直通して情報を知ることでもできぬ。バイカル湖を眺めて走ること二日余り。ハバロフスクに着く。ウラルを出発しての間、実に二十八日を要し、ここで全員入浴のため二日滞在。ハバロフスクで玄麦のヨバシ飯盒に二分の一(二食分)をもらう。次の駅で思わぬ出来事が待ち構えていた。

共産主義・日本宣伝部員

飯揚げのとき、だれかが叫んだことから始まった。汽車の外が騒々しいので、何事が起きたのかと窓越しに覗くと、若い日本人がしきりに何か言っている。「責任者を出せ。」そこで一人代表者として連れて行かれる。待つこと久しい。しばらくして戻って話す言葉は次のとおりであった。『この汽車でだれかが隊長と言った。隊長とは軍国主義の言葉である。君たちは赤旗の歌も歌えな

い。君たちは共産主義の教育は少しも受けていない。ソ同盟が君たちを帰すと言っても我々は君たちを内地へ帰すわけにはゆかぬ。もう一度これから山へ戻ってもらう。』と。

突如として起きたこの事態に、一同は奈落の底に突き落とされた感である。そこで各車両から歌に心得のある者を選出し、この若者に歌の指導を受けて、辛うじて了解を得てナホトカに着くことができたのであった。

ナホトカ

ナホトカの浜は日本人で埋まっている。浜辺に立ち並んだ天幕の行列。次々と立て増やしやら清掃でみな忙しそうである。ここは共産の宣伝部も構え、部員はほとんど若者で立ち回っている。浜だけではなく、後ろの山はアリが這うごとく動いている。浜に集まっている日本人は五万人から六万人といわれ、日本から来る舟を待っていると彼らは言う。我々一行は他の者達と違って、毎日目が醒めたら歌の勉強である。「赤旗の歌」から始まって「同志よ堅く結べ」「メーデーの歌」など、来る日も来る日も歌で明け歌で暮れる毎日である。

帰るためには懸命に歌った。しかし夢は遠い。今ナホトカには先着五万、六万という。もし順番であるとすれば、簡単に帰れそうにない。歌に熱心に真剣でなければ船に乗ることは認められない。

ナホトカに来てちょうど十日はたった今、乗船のための準備である。港の近くで身体検査（全裸で四つばい）、荷物の検査をされた。

乗船と阻止

今、ソ連でのすべてを終え、足は乗船にと棧橋に向かっている。一刻も早くソ連の地を逃れたい気持ちでいっぱいである。

目前に船が待っている。棧橋にソ連兵が二人いる。乗船の人員でも調べているかのようである。

棧橋の中ごろまで来たとき、後尾の方で少し騒々しくなった。何事が起きたのだろう。言い伝えで理由はわかった。

最後の十二、三人はソ連軍の兵に阻止され、棧橋に移ることが許されなかったということである。

残留同胞の無事帰国を祈りつつ。

あとがき

以上、四〇二一部隊より工兵隊に入り、終戦。二十年十二月十四日、奉天出発。抑留生活。二十三年八月、ナホトカに至るまでの幾多の思い出の中から概略を記したものです。

赤い夕日の沈むソ満国境、厳寒と白夜のシベリアの果てに、幾方の友が病に倒れ、飢えに苦しみ、戦いに散った数々の顔を思い出します。黙して、み霊のご冥福を祈り、ペンをおきます。

ソ連抑留回想記

和歌山県 藤本 藤雄

私は満州第二一四部隊、第一中攻城重砲二四センチ榴弾砲所屬で、駐屯地はハルピン近くの阿城だった。昭和二十年になって戦争もますます拡大し、支那や南方に転属して行く人々も多く、私たちの中隊も二百人くらいいたのが八十人くらいになり、恐らく関東軍百万といわ

れたが、すでに三十万くらいになっていたのではないかなと思われた。

いよいよ我々も大移動があるといわれ、各人身辺の整理や資材整備をして、三月ころだったと思うが、部隊全員満州国間島省延吉の近くの八道河の海拔三百メートルくらいの山頂に重砲陣地建設のため、夜を日について岩を切り、穴を掘って、全員火の玉となって大きなトーチカの中に重砲を備砲し、各一門につき百五十発運搬して、戦闘準備を完了した。

外の部隊に応援に行っている戦友を迎えに行くようにとの命令で、私達五人がトラックで琿春に向かったが、途中、国境から引き揚げて来る在留邦人たちは、リュックサックを背負い、杖をついて来る集団はひきも切らず、山の中腹で今晚宿営するのか、飯盒炊事している人々、恐らく野宿するのだろう。また赤十字のトラックに患者や看護婦さんが、疲れはてた女の方々たちも髪を乱し、運転台の屋根まで寝ている。そのような人々を満載して走るトラックの群れが続く。

友を迎えて帰途についたが、途中の部隊の幕舎に、地